

方向

第一四八号 一九九二年一〇月一日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

輪廻からの離脱

—法華經巡礼 76—

1992.8.19 原田憲雄

太陽も、月も、星も、その他あらゆる色と形のあるものの存在を否定していた、生まれつきの盲目の人が、すぐれた医師の、手厚い治療によって視力を獲得し、はじめて太陽や、月や、星や、その他あらゆる色と形のあつるものを見て、「ああ、おれときたら、なんたる阿呆。ひとがしてくれる説明を、信じもせず、了解もしなかつた。そのおれが、いまは、一切を見ることが出来る。おれは盲目から解放され、視力を獲得した」といつて前のおのれの非を悔い、喜んだのはいいが、舌の乾くまもなく、「おれよりすぐれたものはだれもないのだ」と、視力の獲得をおのれの力と錯覚し、盲目から救ってくれた医師のめぐみを忘れ、はやくもおのれが世界の中心、価値判断の基準と思ひ込み、誇らしげに語る。目の開いた盲目の人の喜びの余りとは同情できても、身勝手さから、獲得した視力がかえって心の眼をさらに救い難い闇に人を追い込むさまは、悲惨である。譬喩の舞台の盲目の人を悲惨と感じるわたしたちも、振り返ってみるとじつは「盲目の人」なのだが、それに気づかず、見物席で酒を飲みながら舞台の人の愚かさをあざ笑う。『法華經』の譬喩は、その悲惨の重層をも見通しながら、しずかに話を進めているようである。

05-21.さて、五種の神通力（じんずうりき）をもった聖仙がいるとしよう。神の視力の天眼通（てんげんつう）、

神の聴力の天耳通（てんにつう）、他人の心を知る他心通、前世を記憶している宿命通（しゆくみょうつう）、奇跡を行なう神足通（じんそくつう）によって、他の人を解脱させることに熟練したかれらは、その男にいうだろう。「ふん、おまえは目が開いただけで、なんにも分かつちやいない。なぜそう高ぶるのか。おまえには智慧もなければ、知識もない」かれらはまた、こうもいう「ふん、おまえが家にいるとき、戸外の他のものは見えず、知らない。人々がおまえに、優しい心をもつか、悪意をもつかも。五ヨージャナ向こうの人々の話は知らず、太鼓や法螺貝の音もわからず、聞こえぬ。一クローシャの距離でも、足をあげずには行けぬ。おまえは母の胎内に生まれ、成長したが、そのときは覚えていない。だのにどうして、知識があり、一切を見ることができ、などというのか。ふん、当然さ、おまえが黒を白、白を黒と思うのは」と。

tena ca samayena pañcābhijñā rśayo bhavedyur divyacakṣur divya-śrotra-para-citta-jñāna-pūrva-nivās ānasmṛti-jñāna-rddhi-vimokṣa-kriyā-kuśalās te tam puruṣam evaṃ vadeyuh / kevalam bhoh purṣa tvayā cakṣuh pratilabdham na ta dhavān kim-cij jānāti / kuto bhimānas te samutpannaḥ / na ca te sti pr- ajñā na caśi paṇḍitah / taḥ(W:ta) enam evaṃ vadeyuh / yadā tvam bhoh puruṣāntar-ghnam niṣaṅgo bahir anyāni rūpaṇi na paśyasi na ca jānāsi nāpi te ye sattvāḥ snigdhā-cittā vā drugdha-cittā vā / na vijānīse pañca-yojāntara-sthitasya janasya bhāṣamāṇasya/ dheri-śānkh-ādīnāṃ śabdāṃ na prajānāsi na śrṇosi / krośāntaram apy anutkṣipyā pādau na śaktoṣi (W:śakn-

ogy) gantum/ jāta-samvṛddhas cāsi mātuḥ kukṣau tām ca kriyām na smarasi / (W:) tat katham asi
paṇḍitaḥ katham ca sarvam paśyamīti vadasi/ tat sādhu bhōḥ purusa yad andha-kāram tat prakāsam
iti samjānise yac ca prakāsam tad andha-kāram iti samjānise //

彼時復有。五通仙人。天眼天耳。了知他心。憶念宿住。善証智通。語丈夫言。丈夫。汝唯得眼。余無一知。
汝今何故。已生憍慢。汝亦未有。智慧善巧。彼復作。如是言。丈夫。汝入室坐。外有別色。不見不知。汝
亦不知。衆生善心惡心。五隴闍那辺住。所有言說。鼓貝等聲。汝亦不聞不知。拘盧舍辺。不拳兩足。不能
往到。及生長已。母体作業。汝亦不念。云何汝有巧智。云何作如是言。我悉得見。又汝丈夫。闍作明知。

明作闍知。

「ヨージャナ」は、距離の単位で、一日に行軍しうる長さというが、インドでも一ヨージャナが四クローシャ
だとする説と八クローシャだとする説があり、今の何キロに当るのかはよくわからない。ほぼ八キロに当るだろ
うという説もある。添品では「隴闍那」妙本では「由旬」の文字で音訳する。「足を上げずには行けぬ」という
のがわかりにくいのが、仙人のように空を飛ぶことはできず一歩一歩と両足を使って歩くほかはあるまい、という
のであろうか。ここは男に五神通のいずれの一つも備わっていないことを、聖仙が具体的な例をあげて指摘して
いるのだ。

05-22. そこで男は、聖仙たちに聞く「どんな方法で、どんな善業をなしたならば、そのような智慧を手に入れら
れますか。あなたがたの援助によって、それらの利益をえたいのです」と。するとその聖仙たちは男にい

う「おまえがそう望むなら、森に住み、山の洞窟に坐り、法を思い、おまえの煩惱を捨て去るがいい。こうして頭陀（ずだ）の行を具えたならば、もろもろの神通を得るだろう」と。

atha sa puruṣas tān r̥ṣin evaṃ vadet / ka upayāḥ kiṃ vā śubham karma kṛtvēdṛṣim prajñāṃ pratil-
abheya yuṣmākaṃ prasādac caitan guṇān pratilabheya || (w:/) aha khalu ta r̥ṣayas tasya puruṣasy-
aivam kathayeyuḥ / yadicchasy aranye vasa parvata-guhāsu vā niṣaṅgo dharmam cintaya kleśās ca
te prahātavyāḥ / tathā dhūta-guṇa-samanvāgato bhijñāḥ pratilapsyase || (w:/)

時彼丈夫。語仙人言。以何方便。又作何等清淨業已。当得是智。及於汝等。淨信力故。我亦当得。如此功德。時彼仙人。語丈夫言。若欲如是。汝应当住。空閑山窟。坐思念法。及斷煩惱。当得神通。具足功德。

「頭陀」とは、煩惱の垢を払い落とし、衣食住についてのむさぼりを除く修行。糞掃衣を身に付け、常に乞食（こつじき）し、墓場や樹下などに露坐する……など十二の規範があり、これを十二頭陀行という。

05-23. そこで男は、この意味を了解して出家する。森に住み、こころを専一にし、世間の欲望を捨て去り、五種の神通を得る。神通を得たかれは考えるだろう「わたしは前に他のことをし、なんの功德もなかった。今は望みのままに行くことができる。前にはわたしは智慧とほしく、理解あさく、盲目だった」と。

atha sa puruṣas tam artham brhītvā pravrajitaḥ/ aranye vasann ekagra-citto loka-tṛṣṇāṃ prahāya
pañcābhijñāḥ prāpnyāt / pratilabdhābhijñās ca cintayet / yad aham pūrvam anyat karma kṛtvān
tena me na kaś-cid guṇo dhigataḥ / idantīm yathā-cintitam sacchāmi pūrvam cāham alpa-prajñō

時彼丈夫。受其義已。即行出家。住空閑處。專守一心。斷世渴愛。得五神通。既得五神通已。思惟我先。作於別業。以彼因故。無一功德。可以証知。我念此時。隨所思念。即能得去。我於昔時。少智少慧。有盲而住。

05-24. というのが、カーシャパよ、わたしがこの譬喩を作って知らせようとする意味なのだ。そしてさらに次の意味が明らかにされるべきだ。「生まれついで目の盲人」とは、カーシャパよ、六道の輪廻のなかにいる衆生の別名である。

iti hi kaśyapopamaṣa kṛtā 'svārthasya vijñaptaye / ayam ca punar atrārtho draśṭavyaḥ / jāty-an
dha iti kaśyapa sad-gati-samsāra-sthitānāṃ sattvānāṃ etad adhi vacanam (W:II)

迦葉。作此譬喩。欲令知義。於此義中。復應當見。迦葉。其生盲者。即是六趣。流轉中住。所有衆生。

ここからが、「盲人の譬喩」についての解説である。「六道」とは、05-09.に見える「五つの生存領域」すなわち地獄・餓鬼・畜生・人・天（神）に、阿修羅を加えた六つの境界で、迷える生存の六類型。類型だから、実体ではない。しかし今日、これを実体視する思想や宗教がまたすこぶる盛んになっているようである。

05-25. かれらは正しい法を知らず、煩惱によって無明の闇を増大させ、無明によって盲目となり、無明の盲目は諸行を累積し、行を縁として名と色となり、このようにして、この苦惱だけの大集積が生じるのだ。

ye saddharman na jānanti kleśa-tamo 'ndha-kāram ca samvardhayanti / te cāvidyā 'ndhā avidyā 'ndhās

ca saṃskāraṇ upavicinvanti saṃskāra-pratyayaṃ ca nāma-rūpaṃ yāvad evaṃ asya kevalasya mahato
dūḥha-skandhasya samudayo bhavati ||

若於正法。未有知覺。煩惱盲闇。則當增長。及彼無明闇冥。以無明闇冥故。行業聚集。以行業為緣故。名
色乃至唯有大苦之聚積集。

「無明」とは、文字どおり明るくないことで、物事の眞実を理解できない無知・迷妄をいう。「行」は「有為」ともいわれ、「形成力」と「形成されたもの」の兩義をもち、「現象」といいかえてもよく、それがあまたであるから「諸行」という。われわれはこの現象界のなかで生滅變化し、迷ったり悟ったりしている。われわれにとつての世界は現象界だけだから、これを「一切」とか「一切法」と呼ぶ。仏教では、一切法を五つのカテゴリーに分類する。これを「五蘊(ごうん)」とも「五陰(ごおん)」ともいう。蘊は skandha の訳語の一つで集積(積集・聚)で、五蘊は五つの集まりという意。その五つは、色・受・想・行・識。

「色」(rūpa)とは、おおざっぱな言い方ながら色と形を持つもので、物質である。五蘊のうち、色蘊をのぞいた四蘊が精神現象界に割り当てられる。

「受」(vedanā)は、快・不快・苦・楽などの感受作用と、受けた結果の感情を、ひっくるめていう。

「想」(saṃjñā)は、イメージを取る作用と、作られた表象や概念を、ひっくるめていう。

「行」(saṃskāra)には、広・狭さまざまな意義がある。「諸行無常」というときの行は広義で、五蘊全体をさす。「行蘊」の行は「心のはたらき」を意味する。色を除いた四蘊はいずれも心のはたらきだが、受・想・識の

三つを除いたすべての心のはたらきを「行蘊」とする。喚起・接触・集中・統一・保持などの作用がそれである。「識」(vijāṇa)は、分別・判断・認識の作用と、その主体たる心とを、ひっくり返していう。初期經典では、心(citta)や意(māsa)と同義とされたが、後に解釈が分岐する。

五蘊のうち、精神的な受・想・行・識の四つを名(みょう・nāma)と呼び、これに物質的な色(しき・rūpa)をくわえて名色(みょうしき・nāma-rūpa)という。つまり、一切法すなわち現象世界を、精神と物質の両界に二分大類すれば名色であり、名をさらに四つに細分したものが四蘊。これに色蘊を加えたものが五蘊であった。

この一節は、仏教の根本である縁起についての教説が展開されている。「十二因縁法」のように整ってはいないが、「これあればかれあり、これ生ずるが故にかれ生ず。これなければかれなし、これ滅するが故にかれ滅す」というその基本が五蘊と関連づけ示される。

05-26.このように、無明によって盲目となった衆生たちは、輪廻の中にとどまっている。そこで如来は、慈悲を生じ、三界を離れてはおられるが、かわいい一人息子に対する父親のように慈悲を生じ、三界に下りてきて、衆生たちが輪廻の輪の中をさまざましているのを見られる。ところがかれらは輪廻を離脱することを知らない。そこで如来は、かれらを智慧の眼で見、観察してこう考えられる「あの衆生は、前に善いことをし、憎悪は微弱だが貪欲が強烈であったり、貪欲は微弱であっても憎悪が強烈であったりする。あるものは智慧とぼしく、あるものは知識あり、あるものは円熟して清浄であり、あるものは虚妄の見解をもつ」と。これらの衆生のために、如来は、巧みな方便をもって、三乗を説かれるのだ。

evam avidyā dhās tiṣṭhanti satvāḥ saṃsāre tathāgatas tu karuṇāṃ janayitvā traidhātukān niḥsr-
taḥ pileva priya eka-putrake karuṇāṃ janayitvā traidhātuko 'valirya sattvān saṃsāra-cakre pari-
bhramataḥ saṃpāśyati na ca saṃsārān niḥsaraṇaṃ prajānanti / atha bhagavān saṃsāra-cakre pari-
pāśyati dṛṣtvā ca jānāti / ami sattvāḥ pūrvam kuśalam kṛtvā manda-dveṣās tīvra-rāgā manda-rāgās
tīvra-dveṣāḥ ke-cid alpa-prajñāḥ ke-cit paṇḍitāḥ ke-cit paripāka-śuddhāḥ ke-cin mithyā-dṛṣṭay-
as tesāṃ sattvānāṃ tathāgata upāya-kausālyena trīni yānāni deśayati ||

当生如是。無明闇冥。衆生。流轉中在。唯有如來。超出三界。發生悲愍。亦如慈父。愛念一子。發悲愍已。
下入三界。見彼衆生。於流轉中行。不如實知。出離流轉。仏以仏眼。而觀見之。見已了知。此等衆生。先
世作善。少瞋厚欲。少欲厚瞋。或有少智。或有巧慧。或有成熟清淨。或有邪見。彼等衆生。仏為方便。巧
說三乘。

「輪廻」は、「流轉」ともい、インド古来の考え方で、生命あるものが迷いの世界に生まれかわり死にかわ
りし、車輪のめぐるように止まることなく果てしなくめぐりさまようこと。これが仏教に入って、迷いの世界を
さすようになり、欲界・色界・無色界の三界、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に生死をくりかえす
ことをいう。

この一節を読んでいると、「譬喩品」の、燃える家のなかで、火事の恐ろしさも知らずに遊びたわむれ、出よ
と言われても脱出しようともしない子どもたち、かれらを救出する方便を案じて苦心する父の姿が、ほうふつと

目に浮かび、「わたしこそこれらの衆生の父だ。わたしによってこの衆生は、このような大きな苦の塊から解放されねばならない」という如来の聲が耳に響いてくる。ここは「譬喩品」から展開したものであろう。「藥草喩品」のこの部分が後に付加されたものだとしても、その作者は、「譬喩品」のその父の姿を目に見、その声を耳に聞きながら、おのれの思想の発表者としてではなく、仏の教えを敷演する人として、感動しつつ誦出していたにちがいない。

05-27. この、五神通を得て眼きよらかな聖仙たちと同様、ボサツたちは菩提心を起し、ものは生じもせず起りもしないことを証得し、無上の菩提を完成するのである。

tatra yathā ta rṣayaḥ pañcābhijñā viśuddha-cakṣuṣa evaṃ bodhisattvā bodhi-cittāny utpādhyānū-
pattikīṃ dharmā-kṣāntim pratilābhyānūttarām (W: pratilābhyānūttarām) samyak-sambodhim abhisam-
budyante||

如彼仙人。五通淨眼者。即是菩薩。菩提心生。得無生忍。証覺無上正真之覺。

「ものは生じもせず起りもしないことの証得」とは、添品にいう「無生忍（むしょうにん）」である。無生忍は「無生法忍（むしょうほうにん）」を略した言い方。無生法忍とは、一切のものごとの本質は空だから生じもせず滅しもしないのが実相だという理法を確認する智慧で、「忍」とは認めることである。無生法忍が大乘の悟りといわれ、この智慧をえたとき、ふたたび迷いの世界に墮落することはないので、不退の位に達したとされる。この理法を悟り、信じ、随順するとき、無上の菩提が完成する。

まだ明けきらない朝

かすかな音をたてて塀を越えた猫が

庭をゆっくり歩いて行った

ヘチマのつるがからむ細長い実の裏側の

ガラス戸の中から

わたしは外を見ていた

ある日のこと街で

青い耳飾りのひとが出かけるところにであった

レースのカーディガンの裾が

腰のあたりにひっかかってまくれあがり

骨ばかりの足は赤いサンダルをはいていた

化石のようなからだがかすかな重みを支えて

ゆれながら進んで行くと

人びとは驚いて

問いかけようと言葉をさがした

昼前の陽ざしからのがれるように

そのひとはパチンコ屋のドアを押して消えた

パチンコ屋はいつも光っていて水族館のようだ

みんな岩陰のひっそりした椅子をさがしてすわる

波がたちまち耳をふさいで一人ひとり

隔離するだろう

いちばんよいことなんて誰にもわからない

不幸でかまわない人はいないのだけれど

たいていのことをすぐに忘れてしまうのだ

その日の午後わたしは

川原の土手でヨモギを刈った

丈高く伸びたヨモギの香を握りしめると

幼い日の幸せばかりを思い出した

川原はずっと遠くまで続き

山のように積んだヨモギの車を引いて

雑草の中を行くと

月見草の種子はさやを閉じて肩を寄せあい

夏は終ろうとしていた

海のような夕暮れ

雲は大きな船団を組んで空を広げる

太陽が沈んでからもあたりは

赤く染まったままだった

真夜中

だれかに話しかけようとして

庭の池の方から

力を込めて発する

魚の声を聞くことがある

意味はわからないけれど不思議な

重さを感じる

そのままじっと待っているが

魚はもう何も話さない

『フランスの子どもの詩』

1992 09 27

原 田 慶

比留間恭子さんの訳詩集『フランスの子どもの詩』をいただいた。ワープロを打ち、表紙をつけ、背を赤い製

本テープで飾った素朴で無駄のない手造りの詩集を手にした時、何ともいえない嬉しさと希望が湧いてきた。

最近はめったに本屋へ行かなくなったけれど、新聞の広告を見て読みたいとなると、大きな本屋へ行く。その途方もない本の海の中に立つと、意気が消沈する。そして海のような本の中に、欲しい本がみつからない。地方の出版社とは取り引きがないので注文を受けてから取り寄せるのだという。わたしの若かった頃は、戦争が終ってやっと復興の気ざしが見え初めたばかりで、本はとても大切だった。いつ行っても本屋の棚には同じ本がきちんと並んでいて、次に給料をもらったならこれを買おうと楽しみながら、時々その店に行って本棚から目あての本を取り出してひろい読みし、またそこへ戻って帰ってくるのだった。何か月でも、買えるまでその本は待っていてくれた。そのようにして、D・H・ロレンスなど何冊かの詩集を買ったあの頃には本を一冊、自分のものにすることは何ものにも代え難いほどの幸せだった。そんな頃を思い出させてくれたのがこの訳詩集『フランスの子どもの詩』だった。その後書きに、

一九八八年三月、フランスのル・アーヴル市（パリから北西に二二八キロ、英佛海峡に面する港町）の街に、何百という子どもの詩がはり出されました。十年まえからつづいている、市の行事目標、八八は、子どもの市民権に向けられました。二十五の課外活動センター、五十二の学校の子どもたちが、詩によるメッセージを発表しました。それらの詩からえらんで、子ども、学校、社会、感情、家族、自然など十のジャンルに分けて編集し、この詩集が出来たそうです。

とある。（ね、ぼくのいう通りさ）などと題されたこれらの詩集の中から比留間さんが選訳された作品を、こ

自身の発行の子どもの詩誌『くれよん』に数篇ずつ掲載し、また神戸の後恵子さん発行の翻訳童話雑誌『世界の
子供たち』にも同人として発表してこられた。それをさらに選び直されたのが今度の訳詩集となった。

子どもの詩についてはさまざまの批評があつて、短い文章にすぎないと言う人もある。作品主義でゆくなら、
『赤い鳥』時代のように、子どもに詩の作り方を勉強させなければならぬかもしれないが、現代では、子ども
の詩はそのような作品として見なくてもよいとわたしは思う。感じたことや、言いたいことを、どんどん書ける
ようにさえすれば、それで子どもの詩はできる。ところが、案外、子どもはほとんど言えない、書くべきものを
持っていない、持っているのだけれど、気づいていないのである。子どもの詩の指導とは、それに気づかせるこ
と、話し出した子どもに、つまらない、うるさいなど言わずに、よく聞いてやること、それしかないのではない
だろうか。子どもが、なまいき言ってる、いいかっこしている、知ったかぶりしている、などと思つたら、それ
は、わたし達おとなの在り方を反映しているのだということに気づかなければならない。おとな達が変な目くば
せをしたり、理由もわからずに叱つたりしなければ、子どもはうそを言わない。よく聞いて説明してやれば、た
いてい子どもは折り合いをつけてくれる。

ねえ、オレンジちゃん

あんた

お日さまのように

きいろい色してる。

ナタリイ 六さい

「みかんはみんな黄色いわなあ、リンゴの方がお日さんみたいなのとちがうか」などと思つて、この詩をつま

らないという人はちょっと考えてみた方がよい。昔、日本人は日の丸を見ていたせいか、太陽は赤くてまん丸で、光が筋を引いていた。お日さまは朝夕、昼、天候によってさまざまに見える。ほんとうはどういうものかはみんなよく知っている。ナタリイはオレンジを見た時お日さまを思い出したのだから、まず子どもの感動をおとなが素直に受け止める心を持たなければならぬ。

舟は小さい

海はすごく広い

舟がたったひとつ

一枚の絵のように美しいなど思うだけでなく何かがある。ル・アーヴル市は港町だから、子どもはこのような光景を見ているにちがいない。この詩を読むと、ものごとがきちんと整頓されて何かの起点を示されているように思う。静止しているのではなく、全体は生きて活動していることを感じさせられる。

鳥が飛び立つ、

鳥の羽は、

オーケストラの指揮者のように、

風や雨を指揮する。

しーんとした中にいる

リシャルル 六さい

いま 太陽が沈む……

鳥の歌に

夕日の色が映っている。

「鳥」 ヴェロニック 八さい

鳥の羽ばたきが指揮者の腕を振る様子を想起させているところは子どもらしい。鳥の歌に夕日の色が映っているというのは、訳者の美しい表現かもしれないが、雰囲気として透明で詩的である。

灰色の雲が出てくると

みんな 家に帰る。

雨はゆううつだ。

でも ぼくは雨の友だち

雨と話す、

雨の話を聞いて上げる

雨とダンスする。

雨が行ってしまおうと

ぼくはつまらない。

「雨」 フィリップ 十さい

フィリップは、雨と自分を同じ高さに置いて見ているが、
たりに、京都の子どもの作品をさがしてみた。

ぼくは 雨だいですき。

おばあさんが、戸を開けたらだめと言った。

ぼくは開けなかった。

雨のしずくは、

空から降りてくる

小さな女の子たち。

雨が降ると、

子どもたちが

手をたたいているようだ。

雨、

雨は花の友だち、

みみずや、なめくじや

草や、大地の友だち。

「雨」 エレーヌ 八さい

雨を見たかった、
でも見られない。

雨がザーザーと音を出してふる。

雨がふると水たまりができる。

ぼくは水たまりにはまったことがある。

水たまりって ふしぎだなあ。

雨か晴れかはっきりするのが雨ガエル。

ぼくは雨ガエルをつかまえた。

アマガエルがないた。

今日は雨、と思った。

書いているうちに、あれこれ話がエスカレートしていったのだろう。ふしぎだなあ。と何度も言っているが、何がふしぎなのかははっきりしないし、それほど不思議に思っているようでもない。とにかく努力して書いたあとが見られる。同じ本のすぐ次のページに、気楽に書いたような作品があった。

いもうとは、いつもねぼすけだ。

雨ってふしぎだな。

ぼくの自転車を外においといたらさびていた。

雨はどうして鉄をさびさせるのかなあ。

ふしぎだなあ。

雨って どうして音を出すのだろう。

雨の音を聞いているとピチャッとなった。

それからまだ聞いていると ペチャッとなった。

ふしぎだなあ。

「雨」 栗山裕史 九さい

(昭和四五年『上京の子』より)

いっつも八時ごろに 起きよる。

なんぼ 起こしても、

ねばつて 起きよらへん。
おこつて電気つけたつても、
すやすやねとる。

こんなねぼすけは、しらん。
むりに起こしたらなきよる。

起こしたら 起きもしてへんのに、

「起きてるで。」

落語のような調子のよさで書いている。偶然の作品なのだろう。フランスの子どもの詩には、同じ調子のよさでも少し大人っぽいものがある。

わたし、本で何か悲しいことを読むと

泣くけど 涙は出ない。

泣くのは、

泣くのはわたしの心、

心が痛くなるの。

マガリ 十さい

と、言いよる。

いっしょにねたのに、人一倍ねとる。

いもうと、

およめに いけるやろか。

「ねぼすけのいもうと」太田満宏 九さい

空がとっても蒼いのは

それはね

空が太陽を愛しているからだよ

それから 空が灰色のときは

困っているんだ

雷や雨のせいで。

まっしろのときは

空は悲しいの

空が泣く

それは雨のふるとき。

今日はね

雨がふったり

日がさしたり

空はうれしがってる。

ジャン||ピエール 八さい

愛は来て、またいってしまふ、

きみの方へと、ぼくの方へと。

火が走る、

もう一つの宇宙へと。

地球はうれしそうにおどり、

きちがいみたいになまる。

ぼくはここにじっとしている。

とても飛びたいと思いつながら。

両手を空のほうへさしのべる……

時は過ぎてしまい、

そしてもう決してかえって来ない。

「愛」 ジャン||ミシェル 八さい

人生とは 通り道

夢

イメージ、

通り過ぎて、

もうかえって来ない雲。

なぜ こんなに勉強し、

こんなに苦勞するのか？

死ぬ時にはぜんぶ、

すてなくちゃならないのなら。

人生って、つまらないもの、つまらない、

つまらない、ほんとうにつまらないもの。

ぼくたちはそういうところにいる、

操り人形みたいに、

糸でつるされ、

名訳である。さすがシャンソンの国だと思って感心する。

からもらっていない。次のは前半をすこし省略して、

さあ、早く

お医者さんにいきましよう。

さあ、早く、

食料品やさんにいってきて。

さあ、早く

顔を洗いなさい。

『上京の子』にも、母親をうたう作品がすくなくない。そのひとつ。

変な声を出して。

人生って、つまらないもの、つまらない、

つまらない、ほんとうにつまらないもの。

ト リニテ 十一さい

日本の子どもたちはこのような詩の言葉をおとな達

さあ、早く、

犬を連れてきて、

狩りに行くのよ。

ママといると、いつだって

急いでいなくちゃならない！

「さあ、早く」ジャン＝ポールとパスカル 十さい

ぼくが、まえ、学校から帰ってきたら

「勉強しなさい」と言わはる

ぼくが、勉強おわったら

「そろばん」と言う

帰ってきたら

「テストがまちごうてる」と言わはる

お母さんにも言いぶんがあるだろうが、子どもはたいいてい、母親の口うるさいのにへいこうしている。

何千、何万と、たくさんの人たちが

戦争に出ていった。

たくさんの人たちが傷つけ合う。

たくさんの人たちが殺し合う。

みんなが撃つ

だれを撃つ？

何を？

何故？

戦争の無意味さをしかにつきつけられているようできょっとする。彼らには、と言っているが、その彼らの中

やっとなおせたら

「お・ふ・ろ」と言わはる

ぼくは、お母さんに、「あほ」と言ったら

「うるさい」と言わはる

「お母さん」 浪江 進 九さい

彼らにはそんなことわからない。

鉄砲の撃ち合いで

みんな頭がばかになってる。

そして、何人帰ってくるだろう？

だあれも

みんな死んでしまうんだ。

「戦争」 パスカル 十さい

に自分自身も含めた人間全体を指していることが受けとれる。

戦争って何のためにするのか？

何のために人を殺すのか？

本当になにのためにするのか？

わからない。

もし、戦争時代に、私がいたら、

きっと、今 生きていないだろう。

何のために、人々を苦しませ

悲しませるのか。

この地球上から

戦争がなくなれば、

平和になる。

罪のない人々が死ななくてもいい。

家族と生き別れにならない。

絶対起こしてはいけないのだ。

原ばく 一しゅんにして

たくさんの人々が死んだ。

その原ばくのために

体が不自由になったり、

重い病気にかかった人がいる。

あんなおそろしいもの

あんなこわいもの。

落とした人は、みんなから、

どう思われているか知っているのか。

たぶん、「あくま」と思われているだろう。

うん、きっとそうだ。

私は思う。

こわい思いをする人がいないように

絶対、戦争をしてはいけないと。

私は、本を読んで

わかった。

「戦争」というもの

がどんなものか。

戦争よ、

日本では戦後ながら、戦争について子どもに教えてこなかった。だから子どもは知識としてしか戦争をとらえられない。今、それが反省されている時代だと思う。

フランスの子ども達の訳詩集を持って、九月の初め、比留間恭子さんはその作者達に出会うためにフランスへ行かれた。詩のほかにも、子どものための本を訳して出版しておられるが、比留間さんは行動する詩人だとわたしは思っている。ある画家が、今、詩人は言葉で詩を書くことをやめて、詩を行動しなければならぬと言っておられた。例えばどうということだろうと考えているが、先日テレビを見ていたら、手作りの人形を持って保育園などをまわり、たった一人で自作自演の人形芝居を見せている人があった。子どもの心を引き出すために、自分の作ったストーリーに、その時、その場の子どもの反応を取り入れるのである。あの人も行動の詩人の一人だと思う。

わたしは日本の子どもの詩は内省的で気弱だと思う。思いついたことをはっきり言えなくて、あいまいにしよう。

どうして、世界はあるのだろう。

この世から なくなれ

永遠に！

「戦争」 池崎えり子 十二さい

もしなかったら、なにもしなくてもいい。

それに、学校もいなくていい。

世界は、だれがつくったのだろうか。

もしかみさまなら、かみさまをうらむ。

というように、やりきれなさを虚無的にはきだすところまではいっても、

でも、わたしをつくってくれたから、

……

うらめない。

「世界」 中津海範子 十さい

このように、つい自問自答して迷ってしまう。フランスの子どものように、つまらない、ほんとうにつまらないもの、と言いついてしまふような、しゃれた余裕がないのである。子どもは生まれた時から、おとなの考え方のものにとらえ方のなかで育つ。子どもの詩はおとなの隠された心理を映し出している。いじめ、疎外、責任のなれ、きよろきよろして他律的な判断。そのようなおとな社会のあいまいさが、子どもの詩にそのまま現われている。

次に比留間さんの『くれよん』一九八九年から引いてみる。

夕日は、

海の中に、

どこに

入ったら、

しずむのかな。

おふろに、

ふじ山の中に、

入って、

しずむのかな。

上がる時は、

お魚がふいて

くれるのかな。

佐野 優 三年生

夕日はどこにしずむのかな

と みているうちにゆうちゃん

心の中に沈みます

ゆたかな眠りとなるように

あしたの目覚めがよいように

金色にかがやく小鳥

銀のつゆをふるわせる木々の葉

それらはみんな

目覚めた夕日が衣裳をかえて

ぱっととび出した朝の風景

風おじさん

『クレヨン』では、恭子さんの夫君の比留間一成氏が「風おじさん」になって、それぞれの子どもに返事を付けておられて、それが楽しい。氏はもちろん言葉で詩を書いていらっしゃるが、さまざまに子どもや若い人の教育に携わっておられる、詩を行動する詩人だといえる。このような地道な活動がきつと子どもを変えてゆく。自由に、はっきりと自分の考えを言うことのできる地球人を育てる。

（ね、ぼくのいう通りさ）と得意満面の子ども達を、うなづいて見守っていられる自信あるおとな社会をつくるために、わたし達は努力しなければならぬなあと思う。

比留間恭子さんの、ル・アーヴル市の子ども達との出会いに期待したい。